

## クザーヌスにおける〈周縁からの眼差し〉

——“De concordantia catholica”（『普遍的和合論』）から  
“Idiota篇”へ<sup>(1)</sup>——

八 卷 和 彦

# I. はじめに

「『私はへつらい方は知りません。追従は嫌いです。あなたが真理に耳を傾けることができないかぎり、私はこの教皇庁で進行している全てのことを好みません。全てが腐っています。自らの義務を果たしている人は誰もいません。あなたにせよ枢機卿たちにせよ、教会に配慮することがありません。教会法が守られているでしょうか。法への尊敬があるでしょうか。神の礼拝が遵守されているでしょうか。誰もが野心と食欲に囚われています。私が枢機卿会議で改革について話そうものならば、私は笑い者にされます。ここでは良いことはできません。辞任することをお許し下さい。もうこんなことには耐えられません。私は老人で、休養が必要なのです。人里離れた所に帰ります。そして、私はもう公共の福利のために生きることができないので、自分自身のために生きます』。こう言って彼はわっと泣きだした」。

これはピウス二世教皇が伝える、彼自身に対してのニコラウス・クザーヌスの怒りの爆発である<sup>(2)</sup>。それは1461年の暮れのことであった。クザーヌスはこの教皇（エネア・シルヴィオ・ピッコロミーニ）とは長年の友人関係にあり、晩年の数年は教皇としてクザーヌスの長上でもあった。この激しい慨嘆は、老

人に特有の気短さと涙もろさの現れに過ぎないのだろうか。否、決してそう言って済ますことのできない、充分な、充分過ぎる理由があつてのことである。

よく知られているように、クザーヌスはモーゼル河畔に一市民の子として生まれたが、ハイデルベルクを経てイタリアのパドヴァに遊学し、そこで教会法を修めた。その後、母国に帰り、ケルンで教会法を講じながら、同時に自らも哲学と神学を学んだ。

その後、自身の生まれ故郷ケースも属するトリアの司教区に、教会法博士としての活躍の場をえたクザーヌスは、またたく間に頭角をあらわし、大公マンダーシャイト (Ulrich von Manderscheid) の代理人としてバーゼル公会議に派遣された。そして、そこでもまた、一躍注目を浴びる存在となる。折から教皇と公会議とが教会における首長権を争っていたが、クザーヌスは公会議派の論客として、公会議が優位に立つべき根拠について一書を著した。それが『De concordantia catholica』（『普遍的和合論』）（1432～33年）である。

しかしその後彼は、教会の分裂（シスマ）を再び招来しないためには、公会議派の力によるよりも、教皇の力を強化すべきだと考えるようになり、1437年には教皇派に自らの立場を変える。そしてその直後に、ギリシア教会とローマ・カトリック教会との合同の交渉のための派遣団の一員に加えられ、ビザンティンに赴いた。

その後、公会議派と教皇派が決定的に対立するようになると、クザーヌスは「教皇側のヘラクレス（教皇の懐刀）」<sup>(3)</sup>として活躍を続けた。そして、引き続く多彩な活動の功績により、1450年には、ドイツの、それも市民階層の出身者としては異例なことに<sup>(4)</sup>ついに枢機卿に上げられると共に、同年末、教皇特使として、西ヨーロッパ全体を対象とする教会および修道院改革の旅に出た。それを終えると間もなく、1453年にはアルプス山中のブリクセンの司教に任命された。その地で彼は、世俗領主ジギスムント大公の教会領への介入を排除する改革を企図して、ジギスムントおよびその配下との決定的な対立に立ち到る。

その激烈な争いの中で、命さえも危険にさらしつつ改革を貫徹しようとしていた彼であったが、その企図がもはや非現実的となっていることを認識した、友人であり、冒頭の引用で怒りを向けられた教皇であるピウス二世は、彼をローマに呼び戻した。1458年9月末のことである。そしてその生涯の最後の日まで、クザーヌスはピウス二世と行を共にすることとなった。

以上のような、長く、紆余曲折に富んだ道程を辿ったクザーヌスが、冒頭に引用したような怒りを、晩年、教皇庁において爆発させたのである。

この小論におけるわれわれの目的は、彼のこの道程の根底を貫く一つのモチーフについて注目し、それを跡付け、その哲学的根拠を明らかにすることである。しかし、この考察の範囲は、当面、クザーヌスの公的生涯のほぼ中期、『Idiota篇』を著すまでに限られるであろう。

\*             \*             \*

さて、クザーヌスの最も初期の著作である“De concordantia catholica”を、その思想の総体においてどのように位置づけるかは、従来から議論が多い。実際、既に記したように、公会議派の立場から公会議首位説を補強する、教会法の地平での弁論のための書物であるという性格から判断すれば、また、1440年2月にまとめられた“De docta ignorantia”をもってクザーヌスの哲学的思索が本格的に展開されたと考えるならば、この初期の著作がクザーヌスの哲学説に直接的に関わりをもつはずがない、という判断がなされても不思議ではない。それ故にこそ、クザーヌス哲学の研究史においては、1440年以前のクザーヌスの哲学説について体系立てて解明する研究が存在していなかったと、ゼンガーによって指摘されている状況が存在するのである<sup>(5)</sup>。

また、例えばモイテンは、「(クザーヌスは)のちには自分のこの作品から明らかに距離を取って、もはやそれを引用することがなかった。彼がその生涯の最後に、自分の精神的な業績を集成して豪華な写本に纏めたときにも、その

中へこの作品を収めることは思いとどまったのである」と記したことがある<sup>(6)</sup>。

しかしながら、たとえクザーヌスが晩年この著作をそのまま清書させなかったとしても、そして、その意味で「距離をとった」としても、それはただちにこの著作の内容のすべてから「距離をとった」ことを意味するものではないだろう。実際、ゼンガーも指摘している通りに<sup>(7)</sup>、初期の著作に含まれている思想と“De docta ignorantia”以降の思想とは、当然のことながら関わっている。このことはハウプストも指摘しているところであり、彼はとくに“De pace fidei”の思想との連続性を明らかにしている<sup>(8)</sup>。

われわれはこの両者と見解を共有しつつ、とりわけ〈イディオータ思想〉の要素をこの著作の中に見いだして、それが中期の“Idiota篇”へと展開されていくことを明らかにしたい。このことに成功するならば、単にゼンガーおよびハウプストの立場を強化することに役立つのみならず、クザーヌスにおける〈イディオータ思想〉の源の時間的な深さを明るみに出すことになるであろうし、それによって同時に、この思想がいかに彼自身の現実の生と思惟の深みから生み出され、育み続けられたものであるかをも明らかにしうるであろう。

## II. “De concordantia catholica”における〈イディオータ思想〉

### 1. 〈イディオータ思想〉の要素

この章におけるわれわれの課題を遂行するにあたり、まず〈イディオータ思想〉の要素をおさえておく必要がある。しかしながら、これについては既に詳細に論じたことがあるので<sup>(9)</sup>、ここでは簡単に紹介することにとどめたい。

- 1) 〈イディオータ〉は無学で貧しく、しかし信仰の篤い庶民である。
- 2) この敬虔な〈イディオータ〉こそが、真理である知恵Sapientiaを神から受け取ることができる。
- 3) 〈イディオータ〉は貧しいが、自らの労働により生活の糧を得て、日々の生活に満足している。

- 4) この〈イディオータ〉のように、書物による学問によってよりも、むしろ信仰によって涵養される心の有り方 (Dispositio) によって、真理を与えられるのである。そのためには〈Docta ignorantia〉(無知の知) が重要な役割を果たす。

さて、最初に断っておかねばならないのだが、“De concordantia catholica” には‘Idiota’という用語は用いられてはいない。それは、クザーヌスの思想の成熟という観点から「未だ用いられていない」と言うこともできるのであろうが、しかしながら、考えてみれば用いられていないのも当然である。なぜなら、このような、教会法の法理論上の論争の書物においては、‘Idiota’ という用語が用いられる場はありえないし、また、〈イディオータ〉というような、アイロニカルで文学的な人物像を登場させることも相応しくないからである。

だが、この書物を始めから終わりまで読んで行くと、たしかに〈イディオータ〉的なもの、〈イディオータ思想〉の萌芽の要素にわれわれは出会うことになる。

先ず、冒頭の序文にこういう文言が記されている。文脈の理解のために少し長い引用をしよう。「果して、われわれが現在目のあたりにしている、総公会議の極めて卓越した権能を明らかにするためになされていることを、数年前に非難されることなく明言しえた人がいただろうか。その権能は長いこと、公共の福利と正統的信仰を大いに害しつつ眠りつつけていたのだった。しかし今や、昔のものが、あらゆる自由学芸および機械的学芸の分野での極めて熱意あふれる人々のすべての天賦の才によって、再び求められているのを、われわれは目にしている。そして確かに大いなる熱意によって、あたかも〔歴史の〕総体的転回がもっとも見事に完成されるのが目撃されるようにして、著名にして含蓄深い作家たちをわれわれが取り戻しているばかりではなく、誰もが諸著作の昔の雄弁や文体や形式を楽しんでいるのが見られる。もっとも典型的なのはイタリア人で、彼らはラテン人の本性として、この種の文字上の大いなる雄弁だ

けに満足することなく、彼らの先祖たちの足跡を求めてギリシアの文書も熱心に研究している。しかしながら、われわれドイツ人は、天賦の才においてはるかに異なっているというわけではないが、星座の非調和的な位置のゆえに相対的に劣ったものとして形成されているのであり、したがって、雄弁術の見事に心地よい行使という点において「イタリア人等とは」大いに異なっているが、それはわれわれ自身の過誤に由来するものではない。われわれは、極めて大きな努力をして、いわば本性の力に逆らうようにして、はじめてラテン語を正しく話すことができるのである。従って、他の諸国民は、本書の中に未だ聞いたことがなかった人々の証言が引用されていても驚くべきではない。なぜならば私は、大いなる入念さをもって古い修道院の書庫を巡り歩いて、長いこと使われることなく失われていた多くのオリジナルな文書を集めたからである。それゆえに、これを読む人は、全てが何らかの要約された集成からではなくて、昔のオリジナルから引用されてここに集められていることを信じるべきである。私の無骨な文体によって読む気を失う人が出ないように願っている。なぜなら、粗野な雄弁術により、見栄えはしなくとも極めて明確に表現された意味内容ならば、魅力がないとはいえ、容易に理解されるものであるのだから」<sup>(10)</sup>。

この引用から、われわれはとりあえず次の四点を確認しておくことができるだろう。第一に、ギリシア教会との合同に向けてローマ教会内の合意形成を図るという、バーゼル公会議の目的に対してクザーヌスが大きな希望を抱いていることである。十数年前のコンスタンツ公会議においてローマ教会は四十年近くにおよぶシスマを克服しえたのであるが、その延長上にキリスト教世界全体の統一が実現できるかもしれないと考えているクザーヌスの姿がある。第二には、昔のものへと関心を向けている、当時のルネッサンス的雰囲気の高さである。その一翼をクザーヌス自身も積極的に担っているという自負も伺える。第三には、諸国民が集まっている公会議の場で、自らがその一員であるドイツ人というものに対して、クザーヌスが特別な意識を抱いていることである<sup>(11)</sup>。

そして第四には、第三の点とおそらく密接に係わることであるが、外観は無骨であっても内容の正確さを優先するという、クザーヌスの朴訥にして毅然たる姿勢である。

さて、われわれの本章での課題である〈イディオータ思想〉にとっては、第四の点がとりわけ重要である。確かにクザーヌスは、自分が優美なラテン語で表現ができないことを自認しているのであるが<sup>(12)</sup>、しかしながらクザーヌスはそれを、この本での目的を達成するための欠陥であると見なしているのではない。むしろ、この著作がなされた以下のような背景を、即ち、開催中の公会議において、教皇に対する公会議自体の優越性を証明するという緊急の課題を達成するために、公会議派の代表的論客として頭角を表していたクザーヌスによってまとめられたものであるという事情を考慮すれば、このクザーヌスの記述ははるかに積極的な意味合いを帯びていることが明らかになる。つまり、文言上の雄弁は必ずしも真理を保証するものではないし、それによって真理が明らかにされるわけでもない。それにこだわっているイタリア人は真理を明らかにできなかったが、無骨なドイツ人である私が今それを遂行するのだとでも言いたいような、一種、大胆不敵なニュアンスさえ感じられないだろうか。さらには、後に表された『イディオータ篇—精神について』において<sup>(13)</sup>、「かけ足でかつ粗野にcursorie et rustice」なされた無学な〈イディオータ〉の説明が、雄弁を誇っていた〈オラートール（雄弁家）〉によって「真理を探究する者にとっては、あなたのこれまでの説明が何と優美に見えることだろうか」と称賛されていることを考え合わせるならば、ここでのクザーヌスの主張がいっそう鮮明になり、その結果、〈イディオータ思想〉の先駆的形態とみてもよいことが明らかになるだろう。

## 2. 民の中の「神の種子床」

次に、〈イディオータ思想〉の第二の要素と係わるであろう次のような記述

が、第二巻にある。「キリストの名において集まった人々の中にキリストがいますのは、疑いもないことである」<sup>(14)</sup>。これが「マタイによる福音書」18・20を踏まえていることは明らかであるが、クザーヌスがここに引用しているのは、公会議において秘密にではなく公開かつ自由なる討論の結果としての合意 consensusにおいて、誤りのない決定がなされることの根拠としてである。つまり、決定の正当性は会議の召集者、即ち教皇によって保証されるものではなくて、そこに集う者たちの自由な理性の発現によって保証されるのである。なぜなら、そこには既にキリストいるからである。

このクザーヌスの視点は重要である。なぜなら、彼はこれと同じ構造を、単に総公会議にだけではなくて、さらに「下に位置する」地方の教会会議から一教区の担当司祭の選任にも認めているからである<sup>(15)</sup>。すると、ここから明らかになるのは、「キリストの名において集まる人々」とは単に世界の各司教区の代表者である高位聖職者のことではなく、キリスト教の信仰を有するものであれば誰の集まりでも意味するということである。

実際にクザーヌスの思考はそうように展開されている。若干煩瑣になるが、原文を紹介しつつ考察してみたい。「民 (populus) の中には、霊的にせよ、時間的で物的にせよ、あらゆる権能が可能態として隠れている。……御子が御父に由来するように、聖職者は俗人に由来し、聖霊が〔御子と御父の〕両方に由来するように、修道士は俗人と聖職者との両方に由来する」<sup>(16)</sup>。この思想は、第三巻では次のようにもっと明確に表明されている。「全ての正当な優越性は自発的な臣従に基づく選挙による一致から成立するのである。また、民には、万人に共通で平等の出生と平等の自然法という形で、あの神の種子床が内在しているのである。だから、人間そのものと同じく根本的には神に由来するものとしての全ての権能が、臣従する者たちの共通の合意から成立する時には、それは神的なものとみなされるのである」<sup>(17)</sup>。

キリストの名において生きる民には「神の種子床 *divinum seminarium*」<sup>(18)</sup>



が内在している」とされているのだが、そうであるならば、当然のことながら、そこに「あらゆる権能が可能態として隠れてい」ても不思議ではない。そして、そうであるかぎり、聖職者もその民に由来して存在することも必然である。従って、民はそれ自体として既に独自の存在意義を有するものであることになり、また、上位者に対する賛否の意志表示をする力をもつことも当然のこととなる。

この一連の引用から、クザーヌスが民 (populus) という存在に対して極めて肯定的な思想をもっていたということを容易に見てとれるだろう。そしてこのことは、クザーヌスの思惟の極く初期の段階において、既に〈イディオータ思想〉的なものが抱懷されていたことを意味するであろう。

そしてこの要素は、教皇に対する批判と皇帝に対する改革の提案を主題とするこの“De concordantia catholica”においては、その主題を根拠づける強力なテクとして利用されているのである。

例えば以下のような記述がある。「従って、ペテロの場にして座であるゆえにせよ、また世界の他の諸都市の中で首都としての役割を果しているゆえにあるにせよ、ローマの司教〔教皇のこと〕が首位にある司教であって、偉大な都市の卓越して大いに称賛されるべき議長として、またペテロの偉大な座に着いている者として尊敬されるべきであるとしても、しかしながら、もしその臣従が、他の全ての人々を代表している人々による選挙に基づく同意によって集まっているのでなければ、私は彼を他の全ての人々の議長であり審判の長であるとは信じられない。それゆえに、もしトリアの大司教が教会の会衆によって議長にして頭として選ばれるならば、ローマの司教よりも相応しく、首位にある聖ペトロの後継者であることも、可能性としてはありうるのだ」<sup>(19)</sup>。

ここには、聖職者の地位について、たとえ教皇であっても、教会の会衆、つまり「キリストの名において集まっている民」の自発的な合意によってのみ存在根拠をもつことになるという主張がある。この思想がさらに展開されていくと、次のような発言にまで行き着くことになる。「ローマの司教は、自分が許

さなければ他の聖職者は実務的管理に関しては何もできないと思いなして、主「神」の他の聖職者よりも自分を上に上げてはならない。むしろ、彼は想い起こすべきである、はるか昔、たびたび教皇位が空位だったことがあることを。例えばマルケリヌス教皇の後には七年間にわたって、また他の機会にもほぼ二年間にわたってである。しかしながら聖職者がその活動を止めたことは未だかつてなかったのである」<sup>(20)</sup>。

教皇に対する批判は、場合によっては次のように具体的かつ激しく記される。「われわれが目にして来ているのは、単にローマの司教によって金銭の授受なしの純粋な聖職叙階が篡奪されてしまったということばかりではなく、その額が、ドイツ中の万人が、ただ重いというに止まらず破壊的だと言って嘆いているほどの多額にのぼっていることである。……これら全てのことは貧しい従属者には疫災として到来している。教皇庁は富ならば全てを引き寄せている。……皇帝のものが教皇のものになり、霊的なものがこの世的になっている」<sup>(21)</sup>。以上の、少々長すぎる引用に示されている批判から明らかであるように、クザーヌスの思惟には、貧しい民へと注ぐ温かい〈眼差し〉と、そこに拠って逆に教皇庁を見返す鋭い〈眼差し〉が働いているのである。

### 3. 皇帝への勧告

また、皇帝に対する批判と勧告も、同じく〈イディオータ〉的観点からなされている。例えば、地方の習慣を吟味して、できる限り共通の規則に合わせることを提案しているが、それは、貧しく無学な民が弁護士の三百代言によって書式不備へと陥れられて、訴訟に敗れてしまうことがあるからであり、それ自分にはトリアでしばしば目撃したと言っているのである<sup>(22)</sup>。

さらに、少し長くなるが、クザーヌス当時の神聖ローマ帝国の皇帝であるジギスムントに対する勧告もみることしよう。「皇帝が、自らに託された羊の一匹たりとも失うことのないように、いかなる情愛と熱意をもっていなければ

ならないかをご覧ください。おお、バシレウス皇帝の後継者、極めて敬虔なるジギスムント皇帝よ、あなたの生来の、慈悲深さを働かせたまえ、そして、いつものように、あなたの大いに甘美な雄弁によって、今読んだものに形を与えたまえ。祈りとあらゆる情愛によって、救いの道から逸脱している人々を、とりわけ有名なボヘミア王国の住民を引き寄せたまえ、またこの〔バシレウス〕の物語を、いかなる努力をも傾けて一言一句まであなたのために役立てたまえ。昔の聖なる皇帝たちが、どれほどの熱意をもって正統的信仰の増加のために配慮し努力したことでしょうか。しかし、教会を体現している者たちを保存するためのあなたの熱意が、それよりも小さいことのなからんことを。敬虔と慈悲の道によって可能なすべてのことがなされんことを。教会の花婿であるキリストがこれをご覧になれば、彼はきっと疑いもなくあなたの慈愛深き祈りに驚くべき結果を与えたまうでしょう。謙遜の要求するものが秩序正しくなされるならば、戦勝があなたから背くことはないでしょう。頑固な者、高慢な者、悪魔的な者が、キリストの愛と謙遜で武装してキリストの誉れだけを求めている者につけこむことはできないでしょう」<sup>(23)</sup>。

ここで「今読んだもの」と言われているのは、クザーヌスが直前で引用している、第八公会議（第四コンスタンティノーブル公会議）（869－870）での東ローマ帝国のバシレウス皇帝の演説の一つのことである。クザーヌスはバシレウス皇帝を、とりわけビザンティン教会とローマ教会とが協同してフォティウスの異端を排除した公会議の協同召集者にして庇護者であったことから高く評価し、模範的皇帝として、その演説を長く紹介している<sup>(24)</sup>。また上の引用で「キリストの愛と謙遜で武装してキリストの誉れだけを求めている者」という表現がなされているのは、この演説中でバシレウスが次のような極めて印象的な言葉を述べているからである。「自己の全ての罪を告白すること、そしてキリストのために自らを低くすること、さらには、自分ならびに他の多くの人々を救い出すこと、これらのことを欲しないのは、確かに恥であり最大の不名誉であ

り、さらには神と闘うことでさえある。しかしながら、もしあなた方がこれら全てを恥とみなすならば、私自身は、帝国の冠を戴いた者として、あなた方に対してこの最善の謙遜の模範となろう。私は、経験に乏しく無知な者として、賢者にして学に明るい人々であるあなた方の善〔き始まり〕となろう。私は、罪に転落した者として、清潔にして徳に尽力しているあなた方に対して、第一の例となろう。誰よりも先にこの私こそが、舗石の上に身をなげ出して、紫衣と王冠を軽んじよう。私の臉まで近づくがよい、そして私の両の眼をのぞき込むがよい。そして、皇帝の肩を踏みつけることを大それたことと見なしてはならない。神から王冠を授けられた、この頭頂に足で触れることをためらってはならない。あなた方にとって恥に他ならないあらゆることをこうむる用意が、私にはある。それらは栄光と最大の輝きをもたらすように私にとっては思われるのだ。私は、これらのことをする時に、私自身の栄光を配慮することはない。ただ、共通の統一と一なる教会を祝う人々の喜びを目の当たりにしたいためであり、また、ただ魂の損失をこうむることなく、万人の敵である悪魔が私を捕虜にして私の上で喜ぶことがないためであるにすぎない」<sup>(25)</sup>。

ここに表出されているバシレウスの自らを低くする態度は、列席の高位聖職者にとっては、同時に、厳しい批判として聞こえたに違いない。皇帝自身が、述べられている通りに、「経験に乏しく無知な者」であるかどうか、また、「罪に転落した者」であるかは別として、居並ぶ聖職者たちが、バシレウスから言われているように、「賢者にして学に明るい人々である」かどうか、「清潔にして徳に尽力している」かどうかは、当時大いに問われてしかるべき状態であったはずだからである。ここには典型的に〈イディオータ〉的な思考が表現されているだろう。

そしてクザーヌスは、このバシレウス皇帝の演説の記録を、第Ⅱ章に引用したような自身の努力の成果として見出し、さらにそれをジギスメント皇帝に示して、第二のバシレウスたれ、と語りかけたのである。ジギスメントにとって、

事実としてのこの演説の内容はおそらく強い印象を与えるものであっただろう。だが、これは、このように書物として公表される時、既に単にジギスムントにとってだけ意義を有するにとどまらなかっただろう。むしろ、バーゼル公会議に居並ぶ高位聖職者や他の世俗諸公にとっても、激しい批判として響いたことは容易に想像できるところであるし、むしろクザーヌスは広く後者への影響を意図していたのかも知れないのである。少なくとも、そのような批判の武器として、この論述形式は用いえたはずである<sup>(26)</sup>。

以上のような、少々遠回りの考察によってではあるが、クザーヌスの初期の著作である“De concordantia catholica”の中に、既に〈イディオータ思想〉へとつながる要素が、とりわけ〈民〉への、そして〈民〉からの眼差しという形で存在していることが明らかになったであろう。

### Ⅲ. Repraesentatioの思想

#### 1. その二義性

前節で考察した“De concordantia catholica”における〈イディオータ〉を支えるものとして、クザーヌスに特徴的な〈repraesentatio〉の概念があると考えられる。しかし、この概念が哲学的な背景をもっていることをクザーヌスは明確に述べていないので、その理解において少なからぬ混乱をきたしてきた。今とりあえず、その問題性を端的に記せば、この書物の中で極めて重要な役割を果たしている〈repraesentatio〉という語が、「代表」という意味と同時に、存在論的な地平での「現れ」という意味をも有して、二義性を帯びていることである。

この「現れ」の理解を容易にするために、あえてクザーヌスの他の著作の典型例を見ておこう。まず、説教Ⅳ（1431年）に次のような一節がある。「御子は御父の相等性として生み出された似像であり、人間は類似として創造された似像であり、世界はrepraesentatio（現れ）として創造された似像であるが、

それは、使徒が『今はわれわれは鏡をとおして見ている』と言っている通り、創造主の鏡である」<sup>(27)</sup>。或いは著作年代ではかなり後の1447年になるが、“De Genesi”の一節では次のように記されている。「それゆえ世界とも称されるコスモス即ち美は、こうして到達されえない同一者の比較的明瞭なrepraesentatio（現れ）として生成したのである」<sup>(28)</sup>。

つまりここでクザーヌスは、この目に見える世界が創造主の何らかのrepraesentatio（現れ）であると見なしているのである。

## 2. 「現れ」ゆえに「代表」たりうる

さて、既に述べたように、クザーヌスは教会法の専門家としてこの時期に活躍していたのであるから、当然、この〈repraesentatio〉という語についての教会法理論での含蓄については熟知していたはずである。カレンによると、それは次のようなものであったという<sup>(29)</sup>。

ローマ法にもゲルマン法にも「代表」の概念は存在していなかったが、教会法の分野で初めてそれが成立した。教会法における「代表」概念とは、例えば、司教座聖堂首席司祭がそれに基づいて法的拘束力のある形で司教座聖堂参事会の代わりに行動することができるような形であり、完全な「代表」であった。代表者は自主的な法人として振る舞うのである。従って、「代表する者」と「代表される者」とが互いに法人として、併存することも対立することもありえた。複数の人間の集団も教会法上の権利によって法的拘束力のある形で代表しえた。それ故にこそ、「誰が教会を代表するのか、教皇か公会議か」という論争の種となる大問題が、コンスタンツ公会議とバーゼル公会議において生じたのである。

しかしクザーヌスの“De concordantia catholica”におけるこの概念の新しさは、今言及した法的な意味と並んで、上で既に見たような、プラト的な分有概念と関わる形而上学的な意味が込められていることである。以下で具体的

にこの書物の行文を検討してみよう。「もし諸教会の頭である神父たちが出席しておらず、さらにより上位の権能による合法的な召集が存在していないならば、その公会議には普遍的教会のrepraesentatioが存在しえないことは疑いないところである。しかしながら、合法的な召集がなされたものの、頭である神父たちがまだ到着していないという場合には、その公会議を直ちに急いで進めるべきであるとは、私は思わない。なぜなら、多くの適切に召集された公会議が誤りを犯したことを、記録で読んで知っているからである。それよりもむしろ、神父たちを待つべきである。全員に呼びかけられているならば、その多数の到着で十分であるので、必ず全員の到着を待たねばならないというわけではないが」<sup>(30)</sup>。ここで、「その公会議には普遍的教会のrepraesentatioが存在しない」と言われていることは、その後に続く文章との関係からも分かるように、単なる「代表者」が存在しないということではない。そうではなくて、その公会議には普遍的教会が明らかな形をとって現れていない、現れえないということである。そして同時に、その「普遍的教会の現れ」が成立するということは、この場合、具体的には多くの「諸教会の頭である神父たちが出席していること」である。ここには明らかに、本章の始めに引用した哲学的な地平での「現れ」の意味を見てとることができるだろう。

見方を変えれば、「出席している諸教会の頭である神父たち」が自動的に「代表者」であって、それ故に「普遍的教会の現れ」としてみなしうる、というのではない。多くの諸教会の頭である神父たちが出席しているという事実こそが「普遍的教会の現れ」であり、その限りにおいて彼らは「代表者」でもありうる、というのである。だから「諸教会の頭である神父たち」は、彼らが各地の教会を出発してくる時に既に「普遍的教会の代表者」の資格が賦与されているのではなく、多くの彼らが共通の意志（合意）をもって集まりつつある事実、さらには実際に集まったという事実「普遍的教会が現れる」のであり、その時に、彼らは「普遍的教会の代表者」の資格をうるという訳である。

さらには、このような経緯に基づいて「代表者」となった者は、単に便宜的な代表である訳ではなく、存在論的な根拠によって代表とされていることになる。それ故に代表たる者は、自己のあり方と任務に対する十分な責任を認識しておかねばならないことになる。この点から、代表者の会議の持ち方が問題となるが、それについては後で考察することにしよう。

### 3. 〈Repraesentatio〉の段階

ここでは、もう一つ、キリスト教の教会制度の本質における〈repraesentatio〉が扱われている箇所を紹介してみよう。「ペテロの名前はpetra（岩）に由来し、岩とはキリストを表す教会であり、それゆえにそれはキリストの神秘体でもある。従って、キリストが真理であり、キリストの形あるいは印である岩は教会である。それ故に、キリストが真理であって、キリストの形であり印であるものは岩であるから、それと同様に岩が真理であり、岩の形であり印であるものはペテロであることになる。それ故に明らかなことは、キリストが教会の上にいるように、教会はペテロの上にある。……以上のことから明らかなことは、ペテロが教会を単独でまた極めて混乱した仕方で（なぜなら彼は誤りを犯しうるのだから）形どったように、岩（petra）とペテロの間にはrepraesentatioと印の多くの段階が存在することである。それは、大いに混乱したrepraesentatioと印から、より確かでより真なる中間的repraesentatioを経て、岩つまり真理に到るものである。しかし、一なる教会を表わすことrepraesentareができるのは、一人の人物か一つの集まりだけである。この集まりのことをギリシア人はsynodusと呼んでいる。それゆえに、普遍教会会議において考慮されるべきことは、それが、synodusとしての一致によって普遍的教会をrepraesentareしうる正しく組織された集まりであるかどうか、ということである。例えば、教皇、大司教および司教区の頭たちによって構成されているかどうか、である」<sup>(31)</sup>。



ここで用いられているrepraesentatio, repraesentareも、明らかに「代表」という語義よりも先に、「何かを現すもの」という語義をもっている。つまり〈repraesentatio〉が明らかに二義性の中に立っているのである<sup>(32)</sup>。

そして同時に注目すべきことは、〈repraesentatio〉に段階の存在が指摘されていることである。この点に関わることをクザーヌスは、ほぼ同時期になされた説教XVIで、次のように述べている。「この御言は、神であるゆえに、本質の完成において無限であり、〔御父の〕現れrepraesentatioにおいても無限である。なぜならば、最も普遍的にして最も完全で最も明確に規定されているものは、精神の内での言葉にせよ言い表された言葉にせよ、創造されたか創造されうる他のいかなる言葉が現しうるより以上によく現すからである。その仕方は、御言が神の認識に最もよく適合するようにであり、それゆえにそれは、神つまり神的本質を第一に現す唯一のものである」<sup>(33)</sup>。

ここでは、〈repraesentatio〉について、神の言葉がするそれは完全であるが、創造されたものがするそれは完全ではないことが含意されている。そして、不完全なもの間にはおのずと段階付けが介在することになるだろう。それについては、他の箇所でも次のように記している。「統治権が個別的であればあるほど、統治している人に属する〈repraesentatio〉はいっそう確かになり、また混乱の度合いはいっそう少なくなる」<sup>(34)</sup>。つまり〈repraesentatio〉の確かさの度合いは、それが現すものの範囲の広さに反比例するというのである。

すると、前の引用で「ペテロは誤りを犯しうる」と記されていたことの意味の重さが、ますます明らかになってくる。つまり、現に存在し機能している教会の制度は、それがたとえ神についての〈repraesentatio〉であるとしても、それは常に不完全なものであり、同時にそこに段階の差があることは必然的になるからである。だからこそ彼は、当時、普遍的教会がローマの大司教区にだけ帰せられている事実を嘆くことができたのである<sup>(35)</sup>。この嘆きは、単に彼が

「公会議派」に属しているが故に、教皇側に対する批判としてなされているものと解釈して済ますことはできないであろう。むしろ、上で見たような彼の「repraesentatioの思想」から必然的に生まれざるをえなかったのだと解釈すべきであると思われる。

さて、ここでわれわれは、思考をもう一段階深めねばならない。その理由は、確かにクザーヌスがこの書物では、冒頭の諸章に典型的に見られるように、世界およびその中の全てのものを常に位階*hierarchia*においてとらえようとしているとしても、それが単に〈repraesentatio〉における段階の存在に適用されるに止まっているからである。つまり、ここで言われている〈repraesentatio〉の不完全さは、位階の中に位置づけられつつも、同時にダイナミックなものとしてとらえられている。つまりそれは、クザーヌスにとってもはや改善の余地のない固定的なものではなく、改善される余地があり、実際に改善されるべきものとして、動的なものなのである。彼は、先の引用の直ぐ後で次のように記している。「それ故、上で述べられたことに従って、普遍的教会会議が秩序正しく集められるということが成立するならば、その教会会議は、混乱の度合いがより少なく、真理に向かってはより多く教会を現すことになり、それに応じてそこでなされる判断もより多く可謬性から不可謬性へと向かうことになり、大いに混乱して形どっているローマのただ一人の大司教がなす判断よりも、常にはるかにすぐれたものとなるのである」<sup>(36)</sup>。

ここでは、様々な段階的区別のある〈repraesentatio〉でも、そのそれぞれの段階において、〈repraesentatio〉に改善の余地が存在することが言われていることが分かる。だからこそ、公会議そのものにも、そのあり方によって〈repraesentatio〉の度合いに差が生じることになる。この視点から見る時、公会議であれ、教皇庁における枢機卿会議であれ、さらには皇帝の宮廷における顧問官会議であれ、たえざる自己吟味の必要性が、クザーヌスによって説かれ続けることになる。だが、それについてはもう少し後で再び考察しよう。

## 4. 〈repraesentatio〉と〈consensus〉

さて、クザーヌスによって模範的とみなされている公会議の進められ方は次のようなものである。「もし、ある公会議が正しく合法的に召集されて、呼びかけられた者が全員集まっているならば、そして極めて自由に遂行されて、全員の共通の〈consensus〉（合意）によって正当に結論づけられて、信徒の救いに関することを、いかなる方法によってでも共に決議して口頭で宣言するならば、その公会議は決して誤ることがなかったことを、われわれは記録で読んだ。なぜならば、それがカトリック教会全体を密接に〈repraesentatio〉しているゆえにであり、また、代表と議長をとおして集まっている全ての信徒の合意のゆえにである」<sup>(37)</sup>。この引用にも現れているように、キリスト教界および世俗の帝国の双方にわたって、あまねき和合の成立を提唱するこの書物、“De concordantia catholica”（『普遍的和合論』）において、〈repraesentatio〉と並んで、もう一つ重要な役割を果たしている概念として〈consensus〉（同意、合意）がある。

この概念のクザーヌスにおける特質が現れている一例を示せば、以下のようなものである。「万人は本性的に自由であるから、いかなる支配権も、それが成文法に基づくものであれ、支配者による生きた法に基づくものであれ、それの下で服属する者が、罰の恐れによって悪から離れているように抑制され、彼らの自由が善に向かうように制御されるものであるが、それは専ら服属する者の共感と同意に由来するのである。なぜなら、人は本性的に等しく権能をもち等しく自由であるから、本性的には他の人々と等しい権能をもっているにすぎないただ一人の人が有することになる真で正しく秩序付けられた権能は、他の人々の選任と同意によってのみ成立するからである」<sup>(38)</sup>。

ここには、人間一般の有する自然権的な自由への明確な肯定が述べられており、同意の意義はそこに根拠付けられている。それ故にまた、皇帝と言えども、高貴な動物である人間に対しては、それを強制するよりもむしろ導くべきであ

る、とも言明されているのである<sup>(39)</sup>。

この自由に基づく同意の思想は、さらに以下のように先鋭化されている。「強制的なものにせよ、家政的なものにせよ、また管理的なものにせよ、命令的なものにせよ、『すべての権能は上から来る』と言われているが、自由なキリスト教徒である人を権能が規制し強制するべく実際に外的に動かすことができるためには、正しい規則により、彼らの自発的な服属が条件として要求されるのである。なぜなら彼らは、キリスト教信仰の法によっても自然法によっても、自由の限界を超えて制限されるべきではないからである。このようにして私がさらに明らかにしたかったことは、あらゆる教会の霊的な首長権は人々の承認を媒介としてキリストによって立てられたということである」<sup>(40)</sup>。

ここでは、社会的制度としての教会にせよ帝国にせよ、人間の自由な権利を無条件で奪うことはできずに、人間の自発的な従属を得て、はじめてそれが可能であることが明言されている。

しかしながら、クザーヌスの想定している自発的な合意の形成は、決して各人の恣意にまかせられているものではない。われわれは上の引用で「自由なキリスト教徒である人」と記されていたことに注意を向けたい。つまり、人がキリスト教徒であるかぎり、先に第Ⅱ章2節で言及したとおりに、彼らの中に聖霊が働き、その導きによって必ず合意に達することができる、という思想が働いているのである<sup>(41)</sup>。

こうしてわれわれは、〈consensus〉（同意、合意）と前節までに考察しておいた〈repraesentatio〉との密接な関係を、ここで確認することができるだろう。つまり、各人の見解は、それがいかに異なるものであろうとも、それもまた「自由なキリスト教徒である人」の〈repraesentatio〉であることになる。すると、異なった見解も、それが真摯なものであるかぎり尊重されるべきであることになり、その結果、必ずや聖霊の導きによって合意に到達できることになる。つまりクザーヌスにおいては、〈consensus〉形成の可能性と

〈consensus〉形成への努力が、〈repraesentatio〉の思想から要請されているのである。さらに言えば、より多様な意見が〈consensus〉に導かれることこそが、聖霊がそこにそれだけ生き活きと働いていることの証であることになる<sup>(42)</sup>。

さらに、会議での〈代表者〉に着目してみるならば、〈代表者〉たる者は、自らが神の〈repraesentatio〉であると同時に民の〈repraesentatio〉あること<sup>(43)</sup>を十分に自覚しつつ理性を行使して、真理の探究にかかわらねばならないことになる。すると、その自覚がどのようにすれば担保されるかが問題となる。それについて述べているのが“De concordantia catholica”第二章に、第四回トレド教会会議の記録の引用という形で記されている文章である。その中でクザーヌスは次のように報告している。会議の開会に当たって各司教が随員を後ろに従えて円形に座り、俗人の入場も許された後、一同静粛な時をもった。そして、心を神に向けるべく、共に祈った。そして会議は進められ、全ての議題が結論に達するまで、会議を離れる司教はいなかった。なぜなら、教会に関わることが一切の混乱なくかつ平和的に討論されて結論に到ったとすれば、そこには神が臨在していたと信じるからである、と。そして、クザーヌスはこう付言している。「〔会議での〕この秩序を見てほしい。これこそが守られるべきものであるのに、今日では守られていない」<sup>(44)</sup>。

ここでクザーヌスが強調しているのは、〈代表者〉が自ら果たすべき機能を十分に果たしうるために必要とされる「心の条件」つまりdispositio cordisを整えることの必要性である。その内的条件が相応しく実現されるならば、理性も十分に機能し、その結果、相応しい〈consensus〉が実現するというのである。

以上のような議論をクザーヌスは、この書物のほとんど末尾近くで次のようにまとめている。「われわれはこれまでに、カトリック教会の和合的で真なる調和は正しく組織された統治権にこそ存在するのであること、そしてこの統治

権は、共通の合意と選任から成立し、万人の、或いは人の多数部分の、自由な従属によって存続することを明らかにした。さらに、教会法と神の法、および万人に共通の合意によって人間の理性に適ったように示された法が、この一時的な生命から天の祖国へと到るもっとも相応しい手段としての道を示していることも明らかにした」<sup>(45)</sup>。

このような合意理論は、現代のわれわれから見ると、即ち民主主義的な前提から判断すると、かなり奇異な印象を受けざるをえない要素を多く有するものであることは、よく指摘されている通りである<sup>(46)</sup>。しかしながらそれは、クザーヌスのキリスト教信仰に基づく内的論理によっては、必然のことであったのだ。

#### IV. 〈Repraesentatio〉から〈complicatio - explicatio〉

(包含－展開) へ

ハウプストは、クザーヌスが1442年を境に、議論の多かった〈repraesentatio〉の用語法を完全に止めて、〈complicatio - explicatio〉のシェーマに移行したと記している<sup>(47)</sup>。しかしながらハウプストはどの点で議論が多かったのかは述べていない。そこで先ずわれわれなりにそれを検討しておいて、以下の考察に入ろう。

ハウプストはクザーヌスの〈repraesentatio〉について、主として神学的な観点から次のような三種の基本的な意味を指摘している<sup>(48)</sup>。1) 神が被造物の中に自己を現す。2) 被造物の頂点に立つ人間が神的能力を現す。3) 教会が福音および人間の統一を現す。これに、4) として、われわれが先に公会議での「代表」として扱ったもの、つまり人間の組織を特定の人が現す場合を付加することができるであろう。

そして、この四種を比較考量すると一つ大きな相違が明らかになる。それは、1) の「(創造主である) 神が被造物の中に自己を現す」ことは、神が自ら遂行することであるのに対して、2) 以下の他の三種は、特定の存在が本来自己

とは本質的に関係のない「他のものを現す」ことである。それと同時に、前者二種と後者二種の間にも別の観点から成立する相違がある。つまり、後二種においては、「現すもの」(repraesentans) (ソシュールのsignifiantとしてもよいだろう)と「現されるもの」(repraesentatum) (ソシュールのsignifiéとしてもよいだろう)との間に存在論的に絶対的な相異はないが、前二種においては、「現すもの」が有限な存在であるのに対して、「現されるもの」は神として無限な存在であることにおいて、絶対的相異があるのだ。

さらにまた、後者三種の場合の「現されるもの」は、既に第三章冒頭近くで確認しておいたように、クザーヌスの思考にあっては、それ自体がすべて既に「神の現れ」であるから、後三種の〈repraesentatio〉は、1)の〈repraesentatio〉に支えられて成立していることになる。

これらの輻輳した事情をわきまえば、〈repraesentatio〉という用語は、たしかに“De concordantia catholica”において公会議における「代表権」の所在を論ずる時には便利であったとしても、一般に哲学的、神学的問題を扱う場合には、かえって事態を複雑に混乱させてしまう可能性が大きい。なぜなら、第一の「神が被造物の中に自己を現す」という〈repraesentatio〉が、後の三種と同様な視点から逆に考えられる場合、つまり「被造物が神を現す」ことが想定される場合、そこに本来介在するはずの存在論的な地平での絶対的な相異が見逃されやすくなり、従って汎神論であるという誤解が容易に生まれることになるだろう。おそらくはこの点を回避するためにこそ、クザーヌスは〈repraesentatio〉の用語法を廃止することにしたのであろう。実際、被造物としての世界の存在にそれなりの積極的な価値を認めるクザーヌスの思想には、常に「汎神論」という嫌疑および非難がつきまっていたのである。つまり、この用語の廃止は、クザーヌスの思想の深まりによる結果でもあるだろう。

さて、〈complicatio - explicatio〉のシェーマとは、周知のように新プラトン主義的伝統に立つものであって、クザーヌスにも特徴的である。それは、

存在の源でもある神という絶対的存在が、そのうちに万物を包含していると同時に、その源によって存在している現実の存在者は、絶対的存在の展開として現に存在している、という思想である。

そして、これは果して、哲学的議論だけではなく、〈repraesentatio〉の用語法が担っていた任務、つまり「教会制度における職務関係」にも適用しうるだろうか。クザーヌスは確かにそうしている。その具体例として1442年に書かれた一つの手紙がある。「そしてそれ故に、この教会の感覚しうる頭<sup>こうべ</sup>は人間の中から取り上げられた大司教である。キリストの第一の唯一の証聖者としての彼の中に、この教会そのものが展開的に存在している。……教会を包含的に意味している岩に由来しているペテロの展開は、信徒大衆の異なりの中でも同一の信仰告白を分有している一なる教会である」<sup>(49)</sup>。この文章は、先に第三章の3節でわれわれが引用したものと内容的にはほとんど同じであるが、その表現がまさに〈complicatio - explicatio〉のシェーマでなされていることが分かるであろう。

以上のことから明らかになるもう一点は、“De concordantia catholica”における〈repraesentatio〉の意味を、哲学的背景においては、具体的に〈complicatio - explicatio〉に変換して解釈することも妥当性を有することであり、それはわれわれが既に上で遂行したところでもある。

ではクザーヌスは、もうこれ以降〈repraesentatio〉を用いなかったであろうか。確かに、すでに1440年に執筆された“De docta ignorantia”においては、全面的に〈complicatio - explicatio〉を用いて神と被造世界との関係を説明しており、〈repraesentatio〉は用いていないのであるが、しかしながら、以降一切使用していないわけではない。

それは、第三章冒頭でわれわれが引用した“De genesi”（1447年）にも見られる通りである。また、中期の著作“Idiota de mente”にも用いられており、さらには、晩年の著作“De venatione Sapientiae”（知恵の狩猟について）（14



63年)および“Compendium”にも用いられている<sup>(50)</sup>。その中で、“De genesi”と“De venatione Sapientiae”を除いては、とりたてて重要な役割を果たしているが、この二著においては、相変わらず、主として神が世界に現れることについて〈repraesentatio〉が用いられている。

では、〈repraesentatio〉が〈complicatio – explicatio〉へと変わることによって、クザーヌスが思想を表現する上で何らの支障も生じなかったであろうか。純然たる哲学での存在論的事態を説明するには、むしろ〈complicatio – explicatio〉のシェーマの方が適切であったに違いないが、人間社会における「代表」の意味をも含ませようとする時には、不足するものがあつただろうと思われる。なぜなら、既に見たように“De concordantia catholica”における〈repraesentatio〉は、神が被造世界に自らを現すことであり、その後ろだてを受けて、被造世界における万物がそれぞれ「現れ」となりうるのであり、さらにはその前提の下に、「代表」とは存在者そのもののことではなくて、それが有する機能のことが意味されているからである。つまり、〈explicatio〉はこのような全体的な事態を、〈repraesentatio〉のように一語で、まさに「現す（代表させる）」ことはできないからである。

そこで、〈complicatio – explicatio〉のシェーマを用いつつ、この全体的な事態を表現しようとする場合には、クザーヌスは〈similitudo〉（類似）〈assimilatio〉（類似化）という語を用いて補完しているようだ。それは“De mente”に典型的に見られる<sup>(51)</sup>。

同時にもう一つの目的のために、即ち、特に教会に関する「代表」のあり方を批判的に考察しようとする時に、補完概念として〈イディオータ〉が考案され、使用されたのではないかと考えられるのである。なぜなら、信仰の問題には俗人も参加させるべしというのは、クザーヌスの“De concordantia catholica”以来<sup>(52)</sup>の主張であり、その〈俗人〉という存在が極めて多面的に彫琢された人物像として、後に〈イディオータ〉が設定されているからである。

このように理解してみる時、さらに留意しておくべきことがある。それは、クザーヌスが“De concordantia catholica”において俗人の参加を勧めたのも、また、1450年に教会と修道院の改革のための視察旅行に出る時に〈イディオータ〉を主人公とする一連の書物を著したのも、教会に関わる重要な事柄の決定に彼らを直接的に参加させるためではなかったのである。実際に、“De concordantia catholica”でクザーヌスが言っていることは、信仰に関することは多数決ではなくて満場一致で決定されるべきであるから、司教以外の聖職者が参加しても問題はないはずだし、また俗人が証人として参加しても不都合はないはずだということである<sup>(53)</sup>。

つまり、この〈イディオータ〉とは、それ自体が自ら教会内で積極的決定的任務を果たす存在であるわけではなくて、責任ある決定をする立場にある聖職者が、自らを省みる〈鏡〉として彼らを用いつつ<sup>(54)</sup>、その最終的態度決定に臨むようにと促す、一つの手段として考えるべきである<sup>(55)</sup>。このように〈イディオータ〉に照らしてみる時、そこにも神が現れている者としての〈イディオータ〉を介して、聖職者たちの中に聖霊の働きがいつそう活発化されることになり、その結果、真理に向かったの合意（consensus）に到達できるからであろう。

## V. 〈周縁〉からの眼差し

### 1. 「簡約された公会議」

われわれはこれまでの考察により、クザーヌスでは、〈代表者〉による会議の進め方において〈repraesentatio〉の思想が重要な役割を果たしていることを明らかにしたが、その成果を基礎としながら、ここでさらに、その点に関わって決定的な意味をもつと思われる具体例を検討することにしよう。

まず紹介するのは、クザーヌスが晩年、おそらく1459年頃にまとめた教皇庁改革の提案である“Reformatio generalis”（『普遍的改革』）の一節であ

る。「枢機卿職に召命されている者は、全ての運動が固定され、全ての動揺が安定させられる点としての、教会の堅固な蝶番でなければならない。なぜなら枢機卿団においてこそ、地上に散らされている全教会が同意するのであるから。それゆえに彼らは教会の牧者を選び、そしてその牧者において彼らは同意に到るのである。そうすることによって、彼らにおいて現されて (repraesentive) いる教会もまた同意に到るのである。それゆえに彼らは、われわれと共に〔教皇と共に〕諸国民の代表者 (legati nationum) のようにして、教会の毎日開催される『簡約された公会議』compendiosum conciliumをもつのである。そうすることで、彼らは、われわれの神秘体即ちローマの聖使徒とカトリック教会の部分であり肢体となるのである」<sup>(56)</sup>。

ここでは既に、「現れ」と「代表者」が明確に用語の上で区別されている。しかし構造は、既にわれわれが“De concordantia catholica”について見出したものと同一である。さらに、クザーヌスが枢機卿団の会議のことをあえて「公会議」と名付けていることの意味を、われわれはこれまで考察してきたクザーヌスの「公会議」思想の中に正当に位置づけることによって、見逃さないようにすべきであろう。つまりクザーヌスの主張は、教皇庁の枢機卿団は、自らが教会の現れであると共に諸国民の代表者であることを想起しつつ毎日の「簡約された公会議」に臨まねばならない、という明らかな提案である。

さらに、このような会議が必要とされる根拠としてクザーヌスが考えているのは、他でもない、枢機卿団と教皇自身の自己反省のためである。これについて、少し前の箇所でクザーヌスはこう記している。「目は他の目の汚れを見てとることはできても、自身の汚れを見てとることができないから、〔ローマ教会というキリスト教の神秘体としての教会の〕目も自己を見て視察することはできないのである。それゆえに、自己を他の視察者に委ねて、視察してもらわねばならない。そして、自己が体の他の部分を視察するのに相応しくなるように、正し清めてもらわねばならない」<sup>(57)</sup>。そして「視察は先ずローマ教会と教

皇庁から開始して、次第に個々の司教区へと伝えていくべきである」<sup>(58)</sup>として  
いる。

ここでは明らかに、批判と反省がクザーヌスによって〈眼差し〉として表象  
されると共に、その点で、クザーヌスの厳しい〈眼差し〉が、今や彼自身もそ  
の一員であるローマ教皇庁に対して、先ず第一に向けられていることを見出す  
ことができるだろう。そしてこの〈眼差し〉の源は、他ならぬ〈下から〉であ  
る。ローマ教皇庁は、人の制度としては頂点に立つものだからである。

実は、大いに興味深いことには、これとほぼ同じ内容を有する文章を、クザー  
ヌスは既に“De concordantia catholica”の段階で次のように記していたので  
ある。「聖職者たちは俗人の同意を得つつ司教を選出し、司教たちは、聖職者  
の同意を得つつ大司教を選出する。管区の大司教たちは、司教たちの同意を得  
つつ、ローマ司教を補佐する管区の代表者legatusたちを選出する。この代表  
者は枢機卿と称されるが、彼ら枢機卿が、もし可能な場合には大司教の同意を  
得つつ、教皇を選出するのである。しかし、あまりに長い空位の危険のために、  
同意を待つのが有益ではないと思われる場合には、よりよい秩序によって代替  
されてよいだろう。即ち、ローマ司教は、彼と共に普遍教会を正式に現すre-  
praesentare 継続的公会議をもつのである。これによれば、疑いもなく教会は  
最善に治められるはずである」<sup>(59)</sup>。

つまり、ここでも「継続的公会議」という名前で、毎日開催される枢機卿団  
の会議が想定されている。また、批判と反省が〈眼差し〉として表象されるこ  
とも、同書の第三巻に見出される<sup>(60)</sup>。

しかしながら、後に著された“Reformatio generalis”には、これに先立つ  
“De concordantia catholica”での上記の文章への言及は存在しない。しかし  
これは当然のことでもある。なぜなら、クザーヌスが公会議派から教皇側へと  
立場を変えた後、今や教皇庁の内部にしながら、この改革案を提起しているの  
であり、もし、その内容の実現を図ろうとする限り、それがかつて“De con-

cordantia catholica”にも記した提案と類似していることを明らかにすることは、教皇庁内での説得力をみすみす失うことになるからである。

われわれにとって重要なことは、このクザーヌスの晩年の提案が内容的にクザーヌスの若き時代に著した書物とほとんど同一であるという事実である。教皇庁に入って既に二十年が経過していたにも関わらず、彼はかつての理想を忘れてはいなかったことを証示しているからである。

## 2. 周縁からの〈眼差し〉

クザーヌスは、思索する上で一般に〈眼差し〉について敏感であったように思われる。自分が枢機卿に上げられつつあった時、1449年に故郷のコースで記した自己の略歴の中でこう記している。「船主であったヨハン・クリュフツという男が……トリア司教区のコースに当のニコラウス・クザーヌスを生んだ」と書き始めて、それに続けて自分の経歴と業績を記し、その結果としてついに枢機卿に上げられるに到ったことを書いた上で、こう続けている。「聖なるローマ教会は〔人の〕生まれた所や階層を目を向ける *respicere* ことがなく、〔その人の〕働き *virtus* に対してこそきわめて寛大に報償を与えるのであることを誰もが知ることができるように、当地に滞在している当の枢機卿が1449年10月21日に〔家族に—ここでクザーヌスは老父、兄弟、姉妹とその夫に言及している〕別れを告げるに際して、神を讃えつつこれを記すように命じたのである」<sup>(61)</sup>。ここにもローマ教会のクザーヌスに対する〈眼差し〉、この場合は暖かい〈眼差し〉が感謝の念と共に記されている。

また、中期の著作“De visione Dei”においても、その思索を深めていく上で神の顔とともに〈眼差し〉が重要な役割を果たしている。ここで私は「顔とともに〈眼差し〉が」と記したが、この両者はラテン語では *facies* と *visus* として別の語であるが、ドイツ語では顔が *Gesicht* あるいは *Angesicht* として *Sehen*（見る）から派生している故に、極めて近い語である。場合によっては

Gesichtの一語で、顔と眼差しの両方を意味することも可能である。おそらくクザーヌスは、この書物の思索を進める時に、彼の母語であるドイツ語のこの語を念頭においていたであろう<sup>(62)</sup>。

また、先に扱った“Reformatio generalis”とほぼ同じ頃に著された“De beryllo”においても、緑柱石beryllusを用いて当時開発された眼鏡の比喻を使って、真理探究の方法が説かれている。ここにも〈眼差し〉への注目があるだろう。

しかしながら、今、これらの著作における〈眼差し〉そのものの問題に立ち入ることはできないので、今後の課題として残さざるをえない。そして、われわれの関心の焦点を〈眼差し〉の方向に絞っていこう。

既に言及したように、クザーヌスは自分の生きていた時代および所属する教皇庁を相対化して見る能力を備えていた人物であるが、さらに彼は彼の時代を、聖俗ともにこれまでの歴史で最低、最悪の時代であるとみなしていた<sup>(63)</sup>。この厳しい認識の由来する源は、ヨーロッパ諸国の教会や修道院の書庫に埋もれていた古文書をクザーヌスが自ら見出したことにある。それら文書を読むことによって、彼は同時代の墮落した状況をいよいよ深く認識したに違いない。ここには、いわば忘れられていた視点からの〈眼差し〉が働いているだろう。これをわれわれは、〈周縁からの眼差し〉と規定してみたいのである。

次の〈眼差し〉としては、これも既に第二章第二節の末尾で言及したことがあるが、〈民〉から〈民〉への〈眼差し〉がある。〈民〉もまた封建主義の時代にあっては無視されやすい、その意味では周縁的存在であった。したがって、この〈民〉から〈民〉への〈眼差し〉は、端的に記せば〈イディオータ〉の〈眼差し〉とも言えるものであろう。そして、これもまた一つの〈周縁からの眼差し〉と言えるだろう。

さらに、クザーヌスにはドイツと関わる深い〈眼差し〉がある。先に紹介した略歴の冒頭で、彼は自らがこれまで歩んできた道筋を示すかのように、パド

ヴァで学んだこと、コンスタンティノーブルに教皇使節団の一員として行ったこと、ローマ教会の教皇のために働いてきたこと等を記している。これは、文字通りに受け取るならば、自己の活躍の舞台の広さを示すためであろうが、しかし逆に考えるならば、彼の故郷であるコースがヨーロッパ的視野の中では、いかにドイツの片田舎に過ぎないかを強烈に意識していることでもあるだろう。

その他にも、クザーヌスには若い時からドイツへの「こだわり」があったことは、これまでのわれわれの“*De concordantia catholica*”を対象としての考察からも明らかである。それらを例示すれば以下の通りである。第二章の冒頭で言及した、ラテン語をうまく使いこなせないが真理を伝えることはできるドイツ人という記述がある。また、教会の会衆をよりよく「現す」ならば、トリアの司教の方がローマ教皇よりも、聖ペテロのより相応しい後継者である可能性への言及がある。〈民〉が弁護士の三百代言に惑わされ苦しめられているという、トリアでの彼の経験の報告がある。さらには、教皇庁が富を集めようとしてドイツ人の全てを破滅的に苦しめているという批判がある。

だから、彼の晩年には教皇庁にも、クザーヌスがドイツにこだわり過ぎるといふ批判が生じていたほどである。本小論の冒頭に示したピウス二世教皇の覚書が伝える劇的な場面について、実際、教皇も、クザーヌスはあまりにもドイツに献身してい過ぎると記しているのである<sup>(64)</sup>。

これは、クザーヌスの、ドイツへの〈眼差し〉とドイツからの〈眼差し〉に他ならないだろう。そして、私の経験に基づいて記すことを許してもらうならば、ローマで活躍するクザーヌスにとって、ドイツに帰る度にその地がどのように見えたかも想像に難くないのである。日差しが明るく、緑も色濃いローマから北の祖国ドイツに戻れば、緑の薄い地で〈民〉が実りの少ない労働に励んでいる。しかし、そのような状況にはまったく無頓着に贅の限りを尽くしながら、「神の都」ローマは重い税をドイツに課しては、その〈民〉を破滅的に苦しめている。そのように現実がクザーヌスには迫ってきたであろう。

こう見ることが許されるならば、やはりドイツへの〈眼差し〉とドイツからの〈眼差し〉もまた、〈周縁からの眼差し〉と規定することができるだろう。

さらにわれわれは、もう一つ、クザーヌスの哲学的視点としての〈representatio〉にも周縁の要素を見出すことができるのではないかと考える。それは、既に明らかにしたように、世界内の個々の存在とその総体を神の「現れ」とみなすものであるが、この「現れ」を考察する時のクザーヌスの視線は、先ずもって直接〈上へ〉、つまり神へと向けられるのではない。逆に、いわば〈下へ〉向かうのである。もし神・真理が〈上に〉存在するのならば、〈眼差し〉は直接にそちらに向けられるべきはずであるが、クザーヌスはそうはしない。そちらを全く無視するわけではないが、それにだけ囚われてはいない。

このような、言わば反対方向へと〈眼差し〉を向けることは勇気を要する営みに相違ない。そのような勇気はどこから来ているのだろうか。それは彼の独特の信仰、確信に違いない。自らを省みるとき、外界としての世界だけが神の「現れ」ではなく、見ている自己自身もまた神の「現れ」であることに気付かされたのだろう。全ての人には「神の種子床」が内在しているという言明がそれである。既に言及したことでもあるが、これは自らの中に「神学校」が存在するということでもあった。かくして、クザーヌスの真理探究の〈眼差し〉は、ひとまず世界という〈周縁〉へと向けられ、それを創造した神の偉大さを認識し、その認識に働く自然の光と恩寵の光の助けを受けつつ、神へと向かって行こうとしているように見えるのである。

### 3. Cardinalisとしてのクザーヌスの立場

これまで考察してきたようなクザーヌスの〈眼差し〉には、例えば、〈民〉からの〈眼差し〉と〈民〉への〈眼差し〉のような、機能の双方向性という特質がある。その自由自在さ故に、彼は常に自らの立場を相対化する力をもっていたのだ。これが何に由来するのかと言えば、〈docta ignorantia〉という



思想が思い浮かぶのは大方に共通するところであろう。しかしながら、明確な思想としての〈docta ignorantia〉は、既に言及したように、1438年にギリシアからの帰途の船上で「啓示」として得たものとされている。しかし、われわれが小論で考察の主たる対象としてきた“De concordantia catholica”はそれよりも五年ほど前に著されているのであり、そこにも既に自らの立場を相対化する思惟の営みが存在していた。そうであるならば、源を単純に〈docta ignorantia〉であるとして済ます訳にはいかないであろう。

そこで私は、この段階ではむしろその源を〈repraesentatio〉の思想に置いておくべきではないかと考える。そしてその〈repraesentatio〉の思想が、既に見たような隘路に逢着した時に、それが、ある意味では逆の方向に、つまり否定性に向けて重心をかけたものとしての〈docta ignorantia〉へと発展させられて行くことになったのであろう。そして、この両者のいずれにおいても、その背後に絶対的なものへの信仰が強力に機能しているのである。だからこそ、この思想の流れは、さらに信仰深き〈イディオータ〉によって補完されることにもなるのである。そして、このようにして絶えず背後から働く絶対的なものの支えによって、彼の自在な思考の方向転回が成立しているのであろう。その意味で、この支えは彼にあってまさにcardinalis（蝶番的、枢機卿）であっただろう。

このような視点にして支点を確保しえたからこそ、彼は教皇側に移ってからも、教皇絶対論者になったことはなかったのである<sup>(65)</sup>。それは、本論冒頭に掲げた、クザーヌスの教皇に対するあの激しい憤りがよく示しているところである。

またクザーヌスは、1451年以降、終生故郷に戻ることはなかったにも関わらず、そして華やかな「神の都」ローマが主たる活動の舞台であったにも関わらず、つまりいわば世界の「中心」にあり続けたにも関わらず、上でとらえたような様々な〈周縁への眼差し〉と、〈周縁からの眼差し〉を失うことがなかつ

たのである。

しかしながらそれは、彼にとっては、とりわけ〈イディオータ〉思想を発見した後の彼にとっては、ほとんど何事でもなかったであろう。実際、彼はその後の数年間を、アルプス山中の小さな城に籠もって過ごし、友人であるピッコロミーニ枢機卿（後のピウス二世教皇）の、ローマに来るようにとの呼びかけにもなかなか耳をかさなかったのである。だが、その理由は、単に彼が心がけとしてそのように振る舞ったからではない。彼の哲学的帰結としてそうでなければならなかったのもある。彼は“De docta ignorantia”の中で、世界にはそもそも中心など存在しないのだとして、次のように記している。「世界の機構は、いわば、いたるところにその中心をもっているが、しかし、いかなるところにもその周をもっていないものである。なぜなら、いたるところに存在しているが、しかし、いかなるところにも存在していないところの神が、世界の機構の周であり中心であるのだから」<sup>(66)</sup>。つまりクザーヌスにとって、語の本来の意味での〈周縁〉など存在しないのである。さらに〈イディオータ〉の思想では、社会的には小さくて無視されがちなものやそのような所にこそ神の祝福があるのだと言っているのである<sup>(67)</sup>。つまり、むしろ〈周縁〉こそが信仰的には祝福されうるのである。

クザーヌスをめぐって、彼の生前、死後、そして現代に到るまで、様々なとらえ方があり、毀誉褒貶が交錯しているにせよ、小論の考察の結果として、一つだけは確かなことが明らかになったであろう。それは、彼が以上のような哲学的・信仰的〈cardo 蝶番〉を得て、それに支えられつつ、終生、中枢にありつつも〈周縁への眼差し〉を保持し続けることにより、それを根拠として逆に「絶対」を自称するものを照射し、それを相対化する、〈周縁からの眼差し〉を保持し続けていたことである。

註(1) 本小論は、対象とする主要な著作に“De concordantia catholica”（『普遍的和合論』）が含まれる点で、1993年春のトリアでのクザーヌス国際シンポジウムと関わっているが、それとは独立に研究が進められたので、シンポジウムの記録の刊行をまたずに印刷に付することにした。

なお、この“De concordantia catholica”が主な対象とされる研究は、坂本堯氏の「『De concordantia catholica』と平和思想」（日本クザーヌス学会編『クザーヌス研究序説』（国文社、1986年））以外には、日本語でこれまでほとんど皆無だったので、小論ではテキストからの引用が増えることを、予め断っておきたい。

- (2) Gabel, L.C. (Edit.) (Tr. by F.A. Gragg) : Secret memoirs of a renaissance Pope, The Commentaries of Aeneas Sylvius Piccolomini Pius II (London 1988), p.221.
- (3) Meuthen, E. : Nikolaus von Kues 1401–1464, Skizze einer Biographie (Münster 1992), S. 67. [酒井修訳『ニコラウス・クザーヌス』（法律文化社 1974）83頁]。
- (4) Ibid., S. 23 f. (日本語訳 24 頁) なお、クザーヌスの伝記的叙述についてはこのモイテン上掲書に詳しい。
- (5) Senger, H. G. : Die Philosophie des Nikolaus von Kues vor dem Jahre 1440 (Münster 1971) S. 8. この点においてSengerのこの研究は、そのタイトルからも明らかのように、クザーヌスの哲学における“De docta ignorantia”執筆以前に目を向けて、それからの連続的構造を明らかにしようとした点で先駆的に重要な意義をもつ。しかし、著者自身が断っている通りに (Senger, op.cit. S. 10) , クザーヌスの認識論を中心にした研究であるので、これからわれわれが探究しようとしている〈イディオータ思想〉についての考察は存在していない。
- (6) Meuthen, op.cit.の第3版 (1976) S. 47f. では、この引用の通りに書いていたが、その後、最新の第7版 1992) S. 49ではその表現を以下のように緩和している。「彼は1440年にある説教の中にもう一度この『教会的一致』を引用した時には、ただそのヒエラルヒー的な側面だけを利用したのである。また彼がその生涯の最後に、自分の精神的な業績を集成して豪華な写本に纏めたときにも、その中へこの作品を収めることは思いとどまったのである」。
- (7) Senger, op.cit. S. 7.
- (8) Haubst, R. : Streifzüge in die cusanische Theologie (Münster 1991) S.28 ; S.480ff. ; S. 549.
- (9) K. Yamaki, Die cusanische Weisheitskonzeption im Vergleich zur ostasiatischen Weisheitstradition – “Sapientia” und “Tao” – “Idiota” und “Yuren (Tor)” S. 261, in: Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft, Bd. 20 (Trier 1992) . また、このドイツ語論文の翻訳として、八巻和彦「東アジアにおける知恵概念の伝統とクザーヌスの知恵概念—サピエンティアと道、イディオータと愚人—」(『早稲田商学』第348号 (1991) ,

496頁〕。さらに、八巻和彦「ニコラウス・クザーヌスのIdiota篇における〈Idiota像〉について」『和歌山大学教育学部紀要人文科学』第30集(1981)も参照されたい。

- (10) De concordantia catholica (以下De conc. cath.と略す), I, Praefatio (h. XIV<sub>1</sub>, p. 2 f.) n.2, 1-24.
- (11) この書物の中には、他にもクザーヌスの「ドイツへのこだわり」とでも言うべきものが、何箇所か見られる。これについては後に考察する。
- (12) なお、粗野な人間としての自分が洗練されていない文体で記すという趣旨の文章は、第三巻の序文にもある。(cf. De conc. cath., Indices, R12, 5-7 (h. XIV<sub>1</sub>, p.18) .
- (13) De mente, VII (h. V, p.160f., n.106, 15. - n.107, 3) .
- (14) De conc. cath., II, 9, n.101, 4f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.136) . また, Ibid., II, 3, n.77, 4f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.103) にも同様の文言がある。
- (15) Ibid., II, 18, n.164 (h. XIV<sub>2</sub>, p.200f.) ; Ibid., II, 25, n.203, 24-35 (h. XIV<sub>2</sub>, p.246 f.) .
- (16) Ibid., II, 19, n.168, 1-3 ; 10-12 (h. XIV<sub>2</sub>, p.205) : quomodo in populo omnes potestates tam spirituales in potentia latent quam etiam temporales et corporales... Quoniam sicut filius a patre, ita clerici a laicis, et sicut spiritus sanctus ab utroque, ita religiosi a laicis et a clericis procedent.
- (17) Ibid., III, 4, n.331, 2-7 (h. XIV<sub>3</sub>, p.348) : omnis superioritas ordinata ex electiva concordantia spontaneae subiectionis exoritur, et quod populo illud divinum seminarium per communem omnium hominum aequalem nativitatem et aequalia naturalia iura inest, ut omnis potestas, quae principaliter a deo est sicut et ipse homo, tunc divina censeatur, quando per concordantiam communem a subiectis exoritur. またIbid., II, 24, n.260, 13- n.261, 24. (h. XIV<sub>2</sub>, p.303f.) にも、上位者の強制力の根源は臣従者の選挙と同意によるという記述がある。
- (18) この語句は、「神学校」の意味にもなりうる。また、新約聖書における「からし種」の比喻にも係わっているだろう。「マタイ福音書」13・31-32, 「マルコ福音書」4・30-32を参照。
- (19) De conc. cath., II, 34, n.262, 16-24 (h. XIV<sub>2</sub>, p.304f.) .
- (20) Ibid., III, 41, n.582, 1-5 (h. XIV<sub>3</sub>, p.467) : Non se Romanus pontifex exaltet inter cunctos domini sacerdotes aestimans alios nihil in executoriali administratione, nisi quantum ipse concesserit, posse, sed recordetur pluries longo tempore papatum vacasse, sicut post Marcellianum septem annis et aliis temporibus aliquando duobus, et tamen non erat inefficax sacerdotium. 実際に、第29代のMacellinus教皇(296-304)の後で空位が

続き、また第179代のCelestinus教皇(1241)の後空位が二年続いた。この大胆な指摘は、後のマルティン・ルターの「イエス・キリストの時代に教皇、司教、枢機卿がいたか」という発言を思い起こさせるものがある。(cf. *De libertate Christiana*, W. VII, 58)

- 21) Ibid., III, 29, n.497, 4-8, - n.499, 1-2; 5 (h. XIV<sub>3</sub>, p.433f.) . ここには再びドイツへの言及が見られることに留意しておきたい。さらに、この、教皇庁によるドイツへの圧迫という記述もまた、ルターの『キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト教貴族にあてる書簡』冒頭の記述を想起させるものがある。(cf. *An den Christlichen Adel deutscher Nation von des Christlichen Standes besserung*, W. VI, 405)

22) Ibid., III, 35, n.530 (h. XIV<sub>3</sub>, p.446) .

23) Ibid., III, 24, n.465, (h. XIV<sub>3</sub>, p.418f.) .

- 24) クザーヌスはバシレウスに言及する時には、ほとんどの場合「極めて敬虔にして尊敬されるべきキリスト教徒皇帝バシレウス」という文言か、これに類する表現を繰り返し用いている。

25) Ibid., III, 24, n.457, 3, - n.458, 15 (h. XIV<sub>3</sub>, p.415f.) : *Confusio quidem revera est et maximus pudor, immo vero in deum dimicatio, nolle unumquemque proprium confiteri peccatum et humiliari propter Christum ac lucrari et se et multos. Si autem omnino hoc confusionem arbitramini, ego, cui imperii superposita est corona, forma vobis efficiar huius optimaе humilitatis. Ego, qui imperitus et insipiens sum, bonum initium ero vestrum, qui sapientes estis et scientia clari. Ego, qui in peccatis volutatus sum, primus vobis typus fiam, qui mundi estis, et virtuti operam datis. Ego primus memet super pavementum proicio purpuram et diadema parvipendens. Ascendite ad genas meas et per oculos meos incedite, nec reputetis magnum imperatoris calcare scapulas, neque vereamini pedibus tangere verticem, cui superimponitur a deo donata corona. Omnia pati promptum habeo, quae vobis quidem confusionem, mihi autem gloriam et maximam claritatem conferre videntur. Neque enim in hoc curam gero gloriae meae, tantum ut videam communem unitatem et unam ecclesiam festivitatem celebrantium, tantum ne animae detrimentum patiar et gaudeat super me ille omnium inimicus diabolus, captivum sumens.* 引文中の〔 〕は校訂者によるもの。なお、バシレウスの演説でクザーヌスが評価している点は他にもある。それは、俗人はいかなる賢者で宗教的な人であっても教会の事柄に関与できない、そして司教は、その人格に関わりなく有罪宣告をされることはないという、皇帝が教会に介入する意志がないとする言明である。(Ibid., III, 23, n.445 f. (h. XIV<sub>3</sub>, p. 409f.)

- 26) この東ローマ帝国の皇帝が、農民の息子で厩番から身を起こしたという歴史的事実をクザーヌスが知っていたかどうかは、この書物の記述の限りでは明らかではないが、もしこの事実を

クザーヌスが知っているだけではなく、当時一般に周知の事であったならば、この演説の紹介は、〈イディオータ思想〉という観点から見ていっそう効果的であっただろう。

- ②⑦ Sermo IV, n.35, 19–23 (h. XVI, 1, 72) : Filius est imago aequalitatis genita Patris, homo est imago imitationis creata, mundus imago creata repraesentationis, qui speculum creatoris, ut Apostolus : Videmus nunc per speculum.
- ②⑧ Dialogus de Genesi I, n. 151, 1f. (h. IV Opuscula I, 109) : Sic igitur est cosmos seu pulchritudo, quae et mundus dicitur, exoritus in clariori repraesentatione inattingibilis idem. (酒井紀幸訳『創造についての対話』508頁(『中世思想原典集成 第17巻「中世末期の神秘思想」(小山宙丸監修, 平凡社刊) 所収))。なお、この概念が後の哲学史(例えばライプニッツ等)において有する意味との関連については別の機会に論じたい。
- ②⑨ Kallen, G. : Die politische Theorie im philosophischen System des Nikolaus von Cues, S. 275 f., in: Historische Zeitschrift Bd. 165 (Berlin 1942) .
- ③⑩ De conc. cath., II, 3, n.75, 14–21 (h. XIV<sub>2</sub>, p.100f.) : Sed si nec patres, qui capita ecclesiarum sunt, ibi existunt nec convocatio legitima supremæ potestatis, non dubium in eo concilio universalis ecclesiae repraesentationem esse non posse. Ubi autem legitima præcessit convocatio nec adhuc patres qui capita existunt, convenerunt, non crederem subito currendum esse, quia multa concilia etiam rite convocata errasse legimus, sed expectandi sunt patres, licet non omnes necessario expectantur, quoniam sufficit plures esse et omnes vacatos.
- ③⑪ Ibid., II, 18, n.157, 31–38 ; n.158, 1–10 (h. XIV<sub>2</sub>, p.193f.) : Et quoniam hoc ita est quod Petrus a petra et petra ecclesia quae significat Christum, et propter hoc est corpus eius mysticum, ideo patet, quomodo Christus est veritas, petra – figura sive significatio Christi – ecclesia, huius autem petrae figura sive significatio Petrus. Unde sicut Christus est veritas, cuius figura et significatio est petra sive ecclesia, ita est veritas, cuius significatio et figura est Petrus. Ex quo clare patet ecclesiam supra Petrum esse, sicut supra illam est Christus.... Deinde ex hoc patet quod, sicut Petrus unice et confusissime figurat ecclesiam, qui divalbilis est, quod tunc inter petrem et Petrum sunt plures gradationes repraesentationum et significationum, quousque in petram deveniatur a confusissima repraesentatione et figura usque in veritatem per media certiora et veriora. Uanm autem ecclesiam significare et repraesentare non potest nisi unus aut una congregatio, quam Graeci synodum dicunt. Ex quo evenit quod in synodis universalibus considerari debet, an sit ordinata congeratio, quae ex unione synodica repraesentare habeat universalem ecclesiam, puta ex papa, patriarchis et provinciarum capitibus.なお、

ここでクザーヌスがあげてギリシア語のsynodosを挙げていることは、その語源がsyn+hodosつまり「道行を共にする」ことであることに注意を喚起するつもりがあるのではないだろうか。つまり、同じ意志をもって集まることがsynodosであるとして。

82) そもそも〈repraesentatio〉が二義性を有するか否かが、例えばKallenとKochの間で論争的となったことがある。Cf. Koch, J., Nikolaus von Cues und seine Umwelt, (Heidelberg 1948) S.23ff. Kallen, G., Die handschriftliche Überlieferung der Concordantia catholica des Nikolaus von Kues, (CS VIII (Heidelberg 1963) ) S. 16. 既に渡邊守道氏は, Morimichi Watanabe, “The political Ideas of Nicholas of Cusa” (Genève, 1963) p.93, note 90において、〈repraesentatio〉の二義性が確かに存在すると記している。また、本書のrepraesentatioの用法には、単に「代表」を意味する場合もある。例えば, II, 13, n.125, 6 ; 15, n.132, 11 ; n.133, 19. また、このようにこの二義性をめぐって論争が存在したということは、〈repraesentatio〉に哲学的要素を認めるか否かという論争でもあり、従って、小論冒頭で言及した、“De concordantia catholica”の中に後のクザーヌスの哲学的著作との連続性を見るかどうかの問題の形を変えた姿に他ならないととらえることができるだろう。

83) Sermo XVI, n.9, 1-9 (h.XVI, Fasc. 3, p.265) : Et quia hoc Verbum est infinitum perfectione essentiali, quia Deus, et infinitum in repraesentando, quia universalissime et tamen perfectissime et determinatissime repraesentat plus, quam omnia alia verba mentalia et vocalia, creata et creabilia repraesentare possunt, prout divinae cognitioni peroptime congruit, igitur unicum tnatum est, quod primarie Deum repraesentat sive divinam essentiam. さらにSermo XI, n.5, 1-5 (h.XVI, Fasc. 3, p.225) も参照されたい。

84) De conc. cath., II, 18, n.163, 8-10 (h. XIV 2, p.199) .

85) Ibid., II, 20, n.190, 4-5 (h. XIV 2, p.232) .

86) Ibid., II, 18, n.158, 10-15 (h. XIV 2, p.194) : Unde, quando ita iuxta praemissa supra contingit universalem synodum ordinate congregari, non dubium, quanto illa synodus minus confuse plus tendendo in veritatem repraesentat, tanto eius iudicium plus a fallibilitate versus infallibilitatem tendit et semper maius est iudicio unici Romani pontificis confusissime figurantis. Antiquum est hoc proverbium facilius inveniri, quod a pluribus quaeritur. Quare papae iudicium minus stabile et magis fallibile praesumi quam ipsius et aliorum, et hoc non habet dubium.

87) Ibid., II, 34, n.248, 16-21 (h. XIV 2, p.291) .

88) Ibid., II, 14, n.127, 13-20 (h. XIV 2, p.162) : Unde cum natura omnes sint liberi, tunc omnis principatus, sive consistat in lege scripta sive viva apud principem, per quem

principatum coercentur a malis subditi et eorum regulatur libertas ad bonum metu ponendarum, est a sola concordantia et consensu subiectivo. Nam si natura aequae potentes et aequae liberi homines sunt, vera et ordinata potestas unius communis aequae potentis naturaliter non nisi electione et consensu aliorum constitui potest.

(39) Ibid., III, 23, n.448, 12f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.411) .

(40) Ibid., II, 34, n.261, 18 — n.262, 3. (h. XIV<sub>2</sub>, p.304) : Sic enim dicitur: Quoniam omnis potestas desursum sit, sive coactiva sive oeconomica, regulativa et ordinativa, tamen ad hoc, ut ipsa extrinsece in actum prorumpere possit homines liberos Christianos regulando vel congendo, tunc recte regula praerequirit subiectionem liberam eorum, cum ipsi ex lege fidei Christianae et naturali iure non artarentur extra terminos libertatis. Hoc modo diffusius intendebam deducere omnem praesulatum ecclesiasticum et spirituales a Christo mediante hominum assensu constitui.

(41) Ibid., II, 4, n.78, 1f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.105) . なお、この思想は“De mente”にも、1) 〈イデオータ〉と〈オラトール〉と〈哲学者〉とが三角形に席をとる (I, n.56, 4 (h.<sup>2</sup>V, 89).) 場面、および 2) 諸学派の理論を調和させる議論を〈イデオータ〉がして〈哲学者〉を驚かせる場面 (III, n.71, 1f. (h.<sup>2</sup>V, 107) ) として存在する。

(42) より多様な儀礼の存在が神に喜ばれる、という趣旨の記述が“De pace fidei” 19, n.67 (h. VII, p.62, 3—8) (八巻和彦訳『信仰の平和』(『中世思想原典集成』第17巻(平凡社) 637頁) にもある。ここでは異なる宗教の間でのことが論じられているので、この点に関しても、クザーヌスの思想の発展が見られよう。

(43) ハウプストは、クザーヌスの聖職者における「二重の代表性」die doppelseitige Repräsentanz von oben und von unten を指摘している。Haubst, op. cit. S.536.

(44) De conc. cath., II, 23, n.197f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.239ff.) . さらに註(15) も参照されたい。

(45) Ibid., III, 41, n.567 (h. XIV<sub>3</sub>, p.460f.) .

(46) 例えば、Meuthen, op.cit., S.45 (酒井修訳 52 頁) . Sigmund, P.E., Nicholas of Cusa and medieval political thought (Cambridge, Massachusetts 1963) , p.157. 確かにクザーヌスの合意理論は主観的要素が色濃いが、理性的要素がまったく無視されているわけでないことも、また明らかである。この「主観的要素」と「理性的要素」の独自の関係が、クザーヌスの「神秘主義的認識論」の特徴であり、これは、クザーヌス中期の傑作とされる“De visione Dei” (『神の観について』) を経て、終生存続するものである。この点でも、“De conc. cath.”からの連続性を見てとれるだろう。

(47) Haubst, R., op. cit. S.518 ; 542 ; 550. なお、この用語を用いなくなったことは、クザーヌスが公会議派から教皇側に立場を変えたこととは関係がないであろう。教皇側に移った後の1439



年終わりの手紙でも、この用語を用いている。Cf. Nikolaus von Cues an ein Kartäuserkloster, in: CT IV, 1, S.38f.; 43. また、1440年に著された“De docta ignorantia”においては、神と世界との関係を、〈complicatio – explicatio〉のシェーマのみで説明している。つまり、この時期にクザーヌスは、両方を並行的に用いていたのである。

48) Haubst, R.: op.cit. S.525f.

49) Brief des Nikolaus von Cues an Rodericus Sancius de Arevalo (1442), in: CT II, 1, S.108: Et ob hoc caput huius ecclesiae sensibile est pontifex, qui ex hominibus assumitur.... Explicatio igitur Petri a petra dicti ecclesiam complicantis est ecclesia una eandem confessionem in alteritate multitudinis credentium participans. なお、この文章で教皇のことが「選ばれた」ではなくて「assumitur取り上げられた」とされていることが、クザーヌスの教皇側への立場の変更を如実に示しているだろう。

50) De genesi, I, n. 150f. (h.IV-1, p.109f.) ; III, n.162 (h.IV-1, p.117) . Idiota de mente, VI, n.92, 10 (h.<sup>2</sup>V, p.137) . De venatione Sapientiae, XXXVI, n.107, 5 (h.XII, p.100) ; XXXVIII, n.110, 13 (h.XII, p.104) ; ibid., n.111, 9 (h.XII, p.104) ; ibid., n.112, 22 (h.XII, p.105) . De apice theoriae, n.8, 15 (h.XII, p.123) . Compendium, IV, . 10, 12 (h.XI<sub>3</sub>, p.9) ; X, n.29, 7 (h.XI<sub>3</sub>, p.23) . またクザーヌスには同じような意味を担う apparitio, resplendentia という用語もある。

51) De mente, VII, n.106, 8-10 (h.<sup>2</sup>V, p.158f.) : Utitur autem hoc altissimo modo mens se ipsa, ut ipsa est dei imago, et deus, qui est omnia, in ea relucet, scilicet quando ut viva imago dei ad exemplar suum se omni conatu assimilando convertit. (精神はこの高く上げられた方法を用いて自身を神の似像とする。また、万物である神は、精神の中に輝き出ている。即ち精神が神の生きた似像として、自身の原像に類似するべく全力を尽くしてそれに向かっていく時にである。)

52) De con. cath., II, 16, n.138f.

53) Ibid., II, 16, n.138f. (h. XIV<sub>2</sub>, p.173f.) . なお、Sigmundは、“De concordantia catholica”の彼の手になる英語訳の序文において、クザーヌスには大衆への信頼と大衆不信とか曖昧に併存しているとしている (Nicholas of Cusa, The Catholic Concordance (Cambridge/N.Y./Port Chester/Melbourne/Sydney 1991) p.xxxvii) が、この曖昧さは、〈信仰〉を明確に介在させることで解消されるはずだ。〈イディオータ〉も上記の通り、信仰が篤いがゆえに批判者となりうるように、クザーヌスにおいては、全てが〈信仰〉抜きでは考えられていないのである。Sigmundは、近代の政治理論からのパースペクティブから、これを余りにも〈世俗化〉した場面で考えようとしているだろう。

54) 既に第Ⅲ章1節で引用した説教(註(27))の当該部分, Sermo IV, n.35, 22f.を参照された

い。

59 クザーヌスは、司牧者は信仰上の誤りを彼の下位者によって内々に正されてよいのであり、また上位者からは公然と非難されてよいと記している。Cf. *Ibid.*, II, 17, n.141. 9f. (h. XIV<sub>2</sub>, p. 177) .

60 Ehses, Stephan, *Der Reformentwurf des Kardinals Nikolaus Cusanus*, S.292, in : *Historisches Jahrbuch der Görres Gesellschaft*, 32 (1911) : *Ad cardinalatum enim vocati firmi cardines ecclesiae esse debent, in quibus firmetur omnis motus et stabilitur omnis fluctuatio. In ipso enim collegio est quidam totius dispersae per orbem ecclesiae consensus ; ideo et eligunt postorem ecclesiae, et in quem ipsi consentiunt, ecclesia, quae in ipsis est repraesentative, etiam consentit. Faciunt igitur nobiscum, quotidianum compendiosum ecclesiae concilium quasi legati nationum, et sunt partes et membra corporis nostri mystici, sc. sanctae Romanae apostolicae et catholicae ecclesiae.* なおここで「蝶番」と言われているのは、「枢機卿」cardinalisが「蝶番」cardoを語源としているからである。

61 Ehses, op. cit. S. 285 : *Quoniam oculus, qui aliorum maculas videt, suas non videt, ideo oculus se visitare nequit, sed oportet, ut se subiiciat alii visitatori, qui ipsum visitet, corrigat et mundet, ut sic aptus fiat ad visitandum corporis membra.*

62 *Ibid.*, S.286 : *Et in hoc a nostra ecclesia Romana et curia incipiemus et consequenter visitatores ad singulas provincias mittemus.*

63 *De conc. cath.*, II, 18, n.164, 16-25, [h. XIV<sub>2</sub>, p.201] : *Concurrente eorundem laicorum consensu clerus episcopam, ... et episcopi cum consensu <cleri> metropolitanum, ... et metropolitani provinciarum cum consensu episcoporum legatos provinciarum assistentes Romano pontifici, qui cardinales vocarentur, et illi cardinales papam de consensu metropolitanorum, quantum possibile foret; si autem ob pericula diuturnae vocantiae non videretur utile consensum expectare, quod tunc fieret, sicut hactenus meliori ordine: hoc modo Romanus pontifex secum continuum haberet concilium ordinate repraesentativum universalis ecclesiae, cum quo absque dubio ecclesia optime regeretur.* なお、この二つの記述の類似については、Haubst, R. : op.cit. S.499, Anm. 101でも指摘されている。さらに、脱稿後読むことができた渡邊守道氏の最近の二つの論文も、この辺りの事情を詳細に研究している。M. Watanabe, *Nicholas of Cusa and the Reform of the Roman Curia*, in : O'Malley, Izicki and Christianson (ed.), *Humanity and Divinity in Renaissance and Reformation* (Leiden/N.Y./Köln 1993). および M. Watanabe, *Nicolaus Cu-*

- sanus, *Monastic Reform in the Tyrol and the De Visione Dei*, in : G. Piaia (ed.), *Concordia Discors* (Padova 1993).
- 60 De conc. cath. III, Praefatio, n.278 [h. XIV<sub>3</sub>, p.319].そこでは、法は多数の人々の多数の目から出来ている一つの目であり、感情から自由な理性である。従って多数者によって作られ、誰もが従っている法は、たとえ支配者であろうとも変えてはならない、と記されている。
- 61 Kurze Autobiographie des Nikolaus von Kues, in : *Acta cusana* Nr.849 (I, 2, p.603).なおこの文書の一部は、モイテン前掲書 (S.23f.; 酒井訳 24 頁) にも引用されている。
- 62 清水富雄氏の著作に『顔 主体的全体の世界』(南窓社, 1981年)があり、その中で「クザーヌスの顔」について論じておられるが、残念ながらわれわれの目下の関心との接点は見られない。
- 63 De conc. cath., I, 12, n. 54, 10-12, [h. XIV<sub>1</sub>, p.72] ; III, 31, n.504ff. [h. XIV<sub>3</sub>, p.436f.] )
- 64 Gabel, op. cit. p.363.
- 65 渡邊守道 (Watanabe), op. cit. p.190f ; Kallen, op. cit., S. 84 ; Haubst, op. cit. S.497, Anm. 92.
- 66 De doct. ign. II, 12 [h.I, p.103, 21-p.104, 3.] . (岩崎・大出訳『知ある無知』140頁)
- 67 前掲拙論「ニコラウス・クザーヌスのIdiota篇における〈Idiota像〉について」(『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第30集 (1981)), 特に9頁以下を参照されたい。